

「最初の奇跡物語」

ヨハネによる福音書 第2章 1節～11節

説教 本庄侑子伝道師

聖書にはイエス様の奇跡物語が数多く収められています。今日の聖書箇所では「しるし(英語ではサイン)」（11節）という言葉が使われ、〈合図、前兆、気配〉という意味を持ちます。聖書に記された「しるし」は、これから起こる出来事を指差す〈合図、前兆、気配〉でした。

「最初のしるし」（11節）は、カナという村の結婚式で起こりました。お祝いの席の必需品、ぶどう酒がなくなったことから話は始まります。当時、結婚のお祝いは七日間続きました。用意すべきぶどう酒は並大抵の量ではなかったでしょう。しかし、一生に一回のお祝いの席ですから、家族は生活を切り詰め、長期間にわたって蓄えてきたはずです。

今日は七五三・十二歳児祝福の日です。神様からの祝福を求めてご家族が集われ、教会全体で祈りを合わせます。《この子のためなら》と、ご家族はあらゆることを犠牲にして懸命にお育てになってきたと思います。しかし、ここぞというときに想定外の事件が起きて、何とかしてあげたくても、どうにもならないことがあります。この事件は私たちの人生にも起こり得ます。

イエス様の母が助けを求めに来たとき、イエス様は、この事件に対する私とあなたの見方には大きな違いがある、とおっしゃいました。この時、イエス様はマリアの息子としてではなく、神様の独り子として「婦人よ。」(4節)と呼びかけなければなりません。この時、イエス様は神様のご計画の中にある「わたしの時」(4節)を見据えておられました。「父よ、時が来ました。」(ヨハネによる福音書 第17章1節)と祈り、十字架につけられ、殺される「時」を。

イエス様の前には「ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いて」(6節)ありました。当時、ユダヤ人は身を清めてからでないと食事をしない習慣がありました。心と生活の中心は自分が清くあることにあり、人生には恐れや不安が満ちていました。聖書において「7」が完全数であるのに対して、「6」は完全を目指して頑張り続ける世界の数です。清めのための6つの水がめは、頑張り続けるユダヤ人の終わりのない恐れや不安が表れているかのようでした。

その後、イエス様に命じられた通りに、召し使いたちが水がめの縁いっぱいまで水を満たし、世話役の所に持っていくと、水がぶどう酒に変わっていました。ぶどう酒を蓄えても想定外の

事件の前では無力でしかなく、しかしまた頑張りぶどう酒を蓄え始める。そんな堂々巡りの人間の世界に、イエス様を通して神様の奇跡が溢れ出しました。ぶどう酒は、この後、十字架で流れるイエス様の血潮を指差す「しるし」でした。

神様は、天の父なしで生きようとして行き詰まる私たちに、ご自身の存在を知らせるために、イエス様をお送りくださいました。私たちが神様の方を向いて生きることができるよう、十字架につけてくださいました。未だかつてこの世界に、これほどの奇跡が起きたことはありません。最初の奇跡物語は、世界最大の奇跡物語を指差す「しるし」でした。

十字架の直前に、七つ目の「しるし」として十字架後の復活を指差す〈ラザロの復活〉が起こりました。この後、この世界の歴史の中に、イエス様の十字架と復活という完全な「しるし」がそびえ立ち、神様の完全な計画の全貌が明らかになったのです。それは、終わりの日の約束にまで至ります。復活の後、天の父のもとに帰られたイエス様は、終わりの日、そのご計画を完成させるために再び地上に來られます。

7つの「しるし」と、それらが指差すイエス様の十字架と復活が起こされ、今も語られている目的はただ一つ。私たちがイエス様を信じて神様の方を向いて生きようになるためです。頑張りではどうにもならない事件が起きて、自分の力で頑張り続けるのではなく、絶望して全てを投げ出すのでもなく、終わりの日に向かう神様のご計画に委ねて、神様の方を向いて生き続けるためです。

最初の奇跡物語を起こしたイエス様の力が私たちの人生にも流れ着き、今も続けられている完全で最大の奇跡物語へと導いています。あの時、弟子たちが見たぶどう酒という「しるし」が、大阪教会にも流れ着きました。私たちが神様を知って生きるために流されたイエス様の血潮が、イエス様を信じて生きる者たちの人生に、体の中に流れ込んでいます。

ここに、私たちに本当になくはならぬもの、イエス様の命が流れています。私たちが天の父よ、と呼びかけ、神様を信じて生きるために、今日までの全ては起こったのです。あなたの人生に神様の奇跡が起きているのです。

(記 本庄侑子)